九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

“音響設計学入門’’の出版

藤原，恭司
Kyushu Institute of Design

https://doi.org/10.15017/4061002

出版情報：芸術工学研究. 4, pp.57-58, 2001-08-10. 九州芸術工科大学
バージョン：
権利関係：

“音響設計学入門”の出版

On the publication of “Introduction to the Acoustic Design”

藤原恭司
FUJIWARA Kyoji

This is a comment on the circumstances of the publication “ Introduction to the Acoustic Design ”. This book has been published in memory of 30th anniversary of our Institute. And it is a textbook of a lecture of the same name and written by all member of the Department of the Acoustic Design. It explains all fields lectured and studied in the department. It will be useful for fresh men and high school students who hope to study at our department to understand what they will be able to learn.

本学、九州芸術工科大学は周知のとおり1968年4月、何の母体もなく一つの理念を持って新しく創設された大学である。この大学もすでに 30 余年を過ぎ、ある意味でひとつの成果を問われる時期に突入している。開学当初から存在する学科として、環境設計学科、工業設計学科、画像設計学科、音響設計学科がある。この内、音響設計学科では従来各専門分野に散在しながら教育研究が行われていた音、音楽に関する教育研究を一つの学科にまとめて行うこととなった。学科の内容としては、「音楽」、「聴覚・音声」、「音響構成」、「音響工学」の４小講座が設置された。授業科目も楽器を演奏する「演奏実習」から音を物理的に扱う「音響理論」まで、音に関して幅広く開設された。教員陣容も芸術学部音楽科卒業の教員を初め、文学部心理学科、理学部物理学科、工学部電気・電子工学科、建築学科などを卒業の教員が集められた。その後も何度か組織変更やカリキュラム変更があったが、現在では大講座制をとっており、「音文化学」、「音響環境学」、「音響情報学」の３大講座がある。教育内容的には開学当初と大きな違いはないが、昨今の学問・技術の発展により、従来の授業科目は含みながら「コンピューター音楽」から「ディジタル信号処理」までと教育範囲を拡大している。

大学教育は周知のように基本的には一般教育（現在は教養教育）と専門教育からなっている。通常、1.5 年から２年間の一般教育の上に専門教育が行われ大学教育が完成する。本学では教育の特殊性から基礎実習を伴う感性教育等を初期の段階で実施する必要性があり、また単科大学の便利さもあって、初年次から専門教育をも実

施してきた。いわゆる楔形カリキュラムを採用している。授業科目の中にはそれが単独で成り立ち、高等学校における学習成果を基準に学べるものと、大学入学後の基礎教育を基準にして設定された授業科目がある。後者ではある科目はそれを受講するにはそれ以前に開講されている別の科目を習得することが必須状件となりうる。音響設計学科ではこのような科目が比較的多く、各段階に従って取りこぼしなく授業科目を履修するよう学生たちに注意を喚起してきた。この理由だけではなかろうが、結果としてはその効果が十二分には発揮されず、単位の取りこぼしが多かった。それも必修単位の取りこぼしである。従って上級の学年に進級できない、いわゆる留年生を発生させることとなった。

また学科の教員には学生の入学初期の段階から楔形教育課程のために授業を担当するものもいれば、専門性の故に 3 年次になって初めて授業を担当する者もいた。後者の教員が学生と直接接するのは年度当初のガイダンス、年１回程度の懇談会程度である。学生たちの専門性意識を高め、勉学意欲を掻き立てるためにはより専門性の異なる多くの教員と早い時期に接する方がよいのではないかとの議論も行われた。

このような過程のなかで、学科ではその方策を議論し、1995 年度より入学直後の学生に全ての教員が直接講義するという形式の科目を開講しようと考えた。それは授業担当の全ての教員がオムニバス形式で毎時間異なった内容の講義をするものである。その毎回の講義では各担当教員の専門性の紹介から将来担当する授業科目の内容、そしてその内容を理解するにはそれ以前にいかなる科目を習得しておかなければならないかを、関連させながら授業するという方針とした。そしてその授業科目を“音響設計学概説”と名づけた。またこの授業のための資料として簡単な冊子「音響設計学概説」を作成し、配布してきた。この時期を境に卒業用件としての履修単位数を初めとする制度上の変更が数多くなされてきたので、この授業単独による効果を抽出するのは困難であるが、近年留年生の多寡を問う議論はあまりしなくなった。

1998 年には本学も創立 30 周年を迎え、大学として各種行事を開催した。福岡と東京で開催されたシンポジウム「芸工大イズムとデザイン」や「デザイン新世紀への挑戦」等はその中心的な行事である。その頃、学科でも何か記念事業ができないかとの話が持ち上がり、議論の結果としてこの「音響設計学概説」を単行本にしようということになった。それも授業担当如何にかかわらず学科構成員全員が執筆しようということになった。内容的にも専門性を高く設定せず、高校生にも理解できるように、を目標とした。そして議論の結果、書籍名は「音響設計学入門」、副題「音・音楽・テクノロジー」とすることになった。内容としての詳細は省くが、

第Ⅰ部　音のある生活
　第１章　音をデザインする
　第２章　音を楽しむには
第Ⅱ部　人間・音楽・科学
　第３章　古代ギリシャからの流れ
　第４章　アジアの中の日本
　第５章　楽器の楽理・物理・心理
　第６章　音楽と言葉
第Ⅲ部　声と耳
　第７章　音声
　第８章　聴覚の仕組み
　第９章　音の知覚
　第１０章　「聴」能力を鍛える
第Ⅳ部　新しい音響設計技術
　第１１章　音の物理と音響技術
　第１２章　音と情報
　第１３章　音の加工と保存・伝送

の４部 13 章からなる目次計画である。この計画に対し、編集委員長を務めた吉川教授には出版に関して各出版業者との交渉を願ったが、結果としては販売を目的とした書籍としての出版は不可能とのことであった。そこで学内で援助を求めることにし、学長裁量経費に申請して了承を得、昨年末の 2000 年 12 月 25 日自費出版の形で九州大学出版会から発刊の運びとなった。

学科としてはこれを機会に次の出版計画を持っており、「音響設計学シリーズ」や「音響設計学専門シリーズ」などを教科書の形でまとめたいと考えている。市販ルートにのるかどうかは未知数であるが、学科の授業に関する資料としてでも整理できればFD の一つとして評価できるものと理解している。